

## 日本保育会第五十九回大会に参加して 2

# 「つながり」と「育つこと」

吉川 はる 奈

日本保育学会第五十九回大会に参加し、多くの報告を聞く機会をえた。

今回の大会では、「つながり」と「育つこと」について、感じたり、考えたりすることの多い時間を過ごしたと思う。

北海道において、地域のつながりをつくりなが

ら、子育て支援の実践、保育実践を行う報告も数多く聞いた。そのいずれの報告でも、地域のもつエネルギーとそこに住まう人々のエネルギー、実践を支える保育者をはじめ多くのスタッフのエネルギーを感じる事ができた。そのエネルギーの源は何か、ふとそう思った。

子どもの幸せを願う気持ちなのだろうか。

「ノー」を言う人はいないだろう。しかし、実践報告にあふれるエネルギーからは、実践者の、つまりそれにかかわる人々自身の喜びが伝わってくる。この実践者とは、かかわる人々すべてをさす。保育者はじめスタッフ、そして家族も含む。報告の中で、ある保育者が、「何でこんなに一生懸命続けているのかわかりませんが、でも『ほっておけない』という気持ちなのです」と答えていた。

私自身も子育ての支援の場にかかわっていて、さまざまな親子に出会う。十年ほど前になるが、忘れられない親子との出会いがあった。

はじめて会ったとき、母親は、その雰囲気からは、年齢よりずっとふけて見えた。疲れきっていたのかもしれない。エネルギーのある一歳の子どもを抱えて「どうしていいかわからない」という様子だった。児童館のグループをすすめられて行ってみただけれど、入れずに行かなくなってしまうていた。

入れなかったのは、もちろん母親のほうで、子どもはエネルギーにあふれているので、児童館のような広い場所に行けば大喜びであつたらしい。しかし、母親にとって入りにくい場所に行くことは耐えられず、家の中にあることが多くなっていたらしい。

そのような状態の時に親子に出会った。地域にはたくさんの遊び場がある。

しかし、エネルギーがあふれ、家での遊びに飽きてしまい、家族が困り果てている親子、コミュニケーションがとりにくく、不安を感じている親子、家以外の場所をはじめての場所に緊張が強い子どもと親など、「育てにくい」と感じている親と子が安心して遊ぶ場所がなかった。

そのような親子にと、地域の保健師・保育士・相談員・ボランティアが支援の場に加わり、小さな親子グループができ、そこにこの親子もやってきたのだった。

子どもは広いスペースに生き生きとした表情で走

り回り、母親以外の大人にも笑顔を振りまき、楽しそうであった。一方、母親のほうははじめの数回はどうしていいかわからず、疲れきった表情を見せながら、参加するのに精一杯という感じであった。

とはいえ、休まずに参加していたので、このまま続けてほしいというのがスタッフの願いであった。

そのような時に母親が第二子を妊娠し、大きなお腹を抱えながらの参加になった。それでも休まなかつた。このころになると、母親からは「来るのが子どもだけでなく私にとっても励みになっている」ということばが出るようになっていた。結局、臨月直前までやってきた。

第二子が誕生し、間もなくその親子がやってきた。二か月になったばかりの第二子を抱え、兄になった子どもをつれてやってきた。母親の元氣そうな表情を見て、スタッフも一同、ほっとした。

このような形でふたたび参加を開始し、母親も子どもも着実に自信を得ていくように見えた。家では

第二子の誕生で、兄に思うように向

き合えない母親が、会に参加している時には、他のスタッフが第二子を抱っこしていき、無理なく、子どもに向き合うこともできた。また、スタッフが第二子の成長を一つひとつ喜んでくれることもうれしかったらしい。

このような中で、親子は着実に成長していった。その後、母親はもう少し、参加の場所をふやそうと、幼稚園の園庭開放に通うようになっていた。同じグループに参加していた他の親子にきいて、自ら子どもをつれて参加したという。

さらに二年後、子どもが幼稚園に通うようになってからは、第二子をつれて、児童館の親子グループの運営スタッフとして楽しんで参加していることを知った。以前には、児童館の親子グループはグループが大きく、また「できあがっている雰囲気があ



り」としても参加することはできないといていた  
場である。

たくさんの時間を支えられてきたひとりの母親  
が、支える人として成長していく姿を見ていたよう  
に思う。

子育て支援の場では、子どもの成長とともに母親  
の成長にも出会う。まさしく「ほっておけない」と  
思う人々の支えの中で、母親や子どもが育ってい  
く。

そこで見せる子どもや母親の成長のプロセスに  
じっくりつきあっていると、子どもと母親の姿に自  
信が見られるようになる。

母親自身が自分の行為に自信をもてるようになる  
こと、それは、「育てる」という行為そのものへの  
自信とともに、忘れかけていた自分自身の存在価値  
を取りもどすプロセスであるように思う。

はじめに戻るが、子育て支援にかかわる人々から  
あふれるエネルギーも、自身の存在価値を感じるプ  
ロセスから生まれてくるのではないかと思う。した  
がって、母親も子どももそれを取りまく支援にかか  
わる人々も、長期にわたって自身の存在価値を感じ  
ることができるようになるプロセス、そのような中  
で「つながり」がつくられていくことが大切である  
と思う。

子育て支援とは、子どもが「育つこと」のみ、母  
親が「育つこと」のみを求めているのではなく、そ  
こにかかわるすべての人が「育つこと」を目指して  
いくものではないか。そして「育つこと」は、個々  
の存在価値、すなわち母親自身の存在価値、子ども  
自身の存在価値、そして保育者その他のスタッフ自  
身の存在価値をそれぞれが感じることのできるよう  
な、「つながり」の中で、生涯にわたって求められ  
るものなのではないだろうか。

(埼玉大学)